



槌 木槌(きづち)・金槌(かなづち)

ふればお金が出るという、大黒天(だいこくてん)の打出の小槌は別として、槌(つち)は「打ちたく」という目的・機能がはっきりしているから、その形にそれほど変化があるわけではない。物と接する面つまり頭部と、力を加えるための柄とがあれば、充分である。これには二つの形式がある。それは頭部と柄とが一木で作られている場合と、頭部の側面に穴をあけて、そこに別材の柄を挿入したものである。

このように形式は単純であるが、その呼称ははなはだ多岐にわたっている。材質・大小・形式などによるものである。

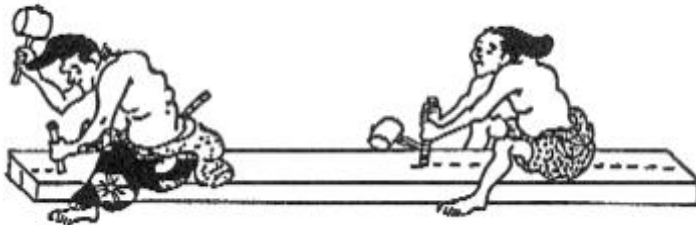
槌の様々な呼び方

道具古事記 前久夫 著 東京美術選書 1983年 による

鍤 <small>かなづち</small> (加奈豆知)	鍤 <small>かなづち</small> (加奈豆知)					『新撰字鏡』	
椀撃 <small>あひ</small> (阿比)	鉄槌	鍤 <small>かなづち</small> (加奈都知)	方椎	終椀 <small>さいづち</small> (散伊都遅)		『倭名類聚鈔』	
鉄挺 <small>カナツチ</small>	鉄槌	鍤				『伊呂波字類抄』	
鉄鍤						『下学集』	
鍤 <small>キヅチ</small> 鉄槌	鍤 同 椀	和名 <small>キヅチ</small>	終椀 <small>サイヅチ</small>	鍤 <small>サイヅチ</small>	韻会惟字	格 同 <small>サイヅチ</small>	『撮壤集』
鍤 <small>音響</small> (和名 加奈都知)	鍤 <small>カク</small>	大椎 <small>げんのう</small> (源翁)	終椀				『和漢三才図会』
方椎 <small>さいづち</small> (散伊都遅)	椀 <small>よこづち</small> (与古都遅)	椀撃 <small>あひ</small> (阿比)	加計夜 <small>かけや</small>				

槌は、その形および機能からいってきわめて簡便であることから、昔からはなはだ需要の多い道具であったに違いない。従って人類が早くから用いていたことは疑いない。しかし、特に木槌の場合は、材質上腐朽しやすいので遺物はきわめて少ない。それでも弥生時代の遺跡である唐古遺跡(奈良)や登呂遺跡などの出土例がある。

つぎに鉄槌(かなづち)に移ろう。『和漢三才図会』に、木槌がノミ打ちや部材の組み立てに用いられたのに対して、鉄槌は釘を打つのに、また柿葦(こけらぶき)の竹釘を打つのに用いたようである。この木槌と鉄槌との使い分けは「大山寺縁起絵巻」に明らかである。ただ江戸時代後期の職人尽絵の類では、大工がノミをたたくのに鉄槌を使っている。だからこの頃にはノミをたたくのは、木槌から鉄槌に移っていた。



春日権現記録 より

参考図書

道具古事記 前久夫 東京美術出版 1983年 より 抜粋

ホームページと電子メールをご利用ください。

URL <http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>

<http://www.kanamonoya.co.jp/>

e-meil ryou@memenet.or.jp



むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください！！